

佐々木忠次郎博士を憶ふ

石 森 直 人

IN MEMORY OF THE LATE DR. CHŪJIRŌ SASAKI

By NAOTO ISITMORI.

本會前會長帝國學士院會員、東京帝國大學名譽教授、理學博士佐々木忠次郎氏は安政四年越前福井藩に生れた。父權六（後長淳）氏は幕末に於ける先覺者で慶應三年幕命を帯び米國に渡り銃砲を求め又明治六年埃國博覽會に遣はされなどして新知識をもたらし、特に明治年間に養蠶製絲方面に貢獻した事多く此方面に有名な人であつたが齡八十七で先年物故された。此人を父として生れた佐々木博士は幼時から粗衣粗食に甘んじて刻苦勉勵され、明治14年東京大學生物學科を卒業し同年東京大學準助教授となり、15年駒場農學校助教授、19年東京農林學校教授、22年養蠶水產學研究の爲獨逸に留學、24年理學博士の學位をうけ其年歸朝、明治26年動物學昆蟲學養蠶學の講座が創設され其第2講座を擔任し42年再度の洋行をし大正10年退官せらるる迄39年の長きに亘つて大學に教鞭をとられ研究された。退官の年勅旨を以て東京帝國大學名譽教授となられ11年帝國學士院會員に列せられた。

以上は博士の官歴の主脈であつて、此外大藏省農商務省等の依頼による害蟲、蠶病、眞珠貝の移植試験、桑樹萎縮病調査等の調査研究、文部省の小學理科教科書編纂委員等の外東京農業大學講師、地方講演等水產學昆蟲學養蠶學及び教育事業に其一生を捧げられ直接間接に教をうけたものは全國に満ちて居る。今此等事蹟の一々は擧げ切れぬから末尾の著書目録に譲り茲に博士の研究の中著名なものを述べて見よう。

カヒコノウジバヘ（蠶蛆蠅）は我國固有の寄生蠅で其寄生方法及び複雑興味ある生活史を明らかにした事は世界の昆蟲學界の視聽を引き、今猶廣く引用されて居る處である。此研究は又養蠶界に於て毎年何千萬圓の被害を與へて居

る蠶蛆の驅除豫防法の根底をなして居る。又昆蟲學は成蟲を採集し其分類に没頭して居つた當時に於て、博士は昆蟲を其卵又は幼蟲から飼育し其經過習性を明らかにし、幼蟲の食餌、天敵等をも研究し以て本邦昆蟲生態學、應用昆蟲學の基礎を築かれた。其著日本農作物害蟲篇、日本樹木害蟲篇以下各種の害蟲篇は皆實際に飼育觀察された結果である。如斯き仕事は甚だ地味で努力耐忍を要することであるにも拘らず博士は最後まで倦まず續けられた事は誠に偉とすべきことである。退官後に於ても昆蟲の觀察は常に續けられ、それが實に根氣のよいもので、近年は大阪で發見されたオガクマノキの葉に蟲癭を生ずる蚜蟲の、冬の寄主を探さうと毎年續けられて居つた。觀察には殆ど必ず寫生圖を描かれ黒いクロスのノートブックに記録と共に張りこんで居られた。この様なノートブックが各目に分けて蜘蛛、壁蝨の類迄何十冊も書齋の棚に並べてあるのに驚かされる。その内容の大部分が未發表のものであると思ふ時常人の及ぶべからざる根氣と精勵に讚嘆せざるを得ない。以上の事蹟の外桑の介殼蟲、イボク蠟蟲、野生絹絲蟲の研究等種々あるが昆蟲學と養蠶學との兩方に跨るものが多いのは擔任の講座から考へて當然なことである。

養蠶學の方面では微粒子病の研究調査及び其防除法につき力を盡され又蠶の膿病の研究に於ては刺戟病因説を出されて居る。筆者は今同じ病に就いて研究して居るが博士の説は此病因研究の上に種々の暗示を與へて居る。

本邦に於ける養蠶學は博士の嚴父長淳翁によつて其芽生が出来博士によつて其基礎體系が成つたといふても過言ではないであらうと信ずる。

以上の如く我昆蟲學界養蠶學界に大功のあつた佐々木博士は昭和13年5月突然腸狭窄を起され手術を餘儀なくし、同年6月25日薨去された。行年八十二。生前の功を思召され旭日重光章を賜はつた。

遺骨は青山墓地に埋められ、碑には淨眞院殿清空崇忠居士とある。本會は屢次會長として絶大なる御盡力を戴いた此偉人に對し謹んで哀惜の意を表する。

佐々木博士の半面

博士は5尺2寸位小柄な人であつたが眉濃く、長く長壽の相を具へて居られた。清麗潔白よく學者としての本分を守り政策的の事を好まず、邊幅を飾らず散切頭で、よく太い洋傘を手に徒歩を好み乗物は電車バス等を選まれ、自ら奉ずること薄く、おつき合ひでもなければ自動車等にはあまり乗られなかつた。幼

時より粗衣粗食に鍛はれ相當の労働をもされたものの如く、博士の手指は太くトルストイに見せたらば喜びさうな形であつた。この手で蟲の圖を實に要領よく描き又餘技に人物畫繪をよく畫かれ書も亦雄健で老人風の弱い所はなかつた。十年位前から惠比壽大黒の彫刻を集め、喜壽の祝をされた時は惠比壽様の繪に肥後大守の教訓を賛にしたものを親戚知友に配られたのが方々にある。精力家といふ風ではなく所謂手まめ筆まめで見聞觀察はすべて手記し分類し不自由な身分でありながら人手を煩はされなかつたことも偉とすべきである。研究的の事は獨り動物學の方面のみならず果實に就いても以前から寫生し記載されたものが何冊もある。これ等の稿本は勿論未刊行のもので永久に世に出ずにしまふのではないかと惜まれる。此等は黙々と倦まずたゆまず堅忍持久された結果で、我々が以て範とすべきものである。

趣味としては釣を好まれ、又老年になられてからも立山、白馬、白山等の高山に登られた。書畫にも一隻眼をもたれ蒐集されたものには油壺、惠比壽大黒及び根付がある。油壺は餘り多からずして止められ、惠比壽大黒は近年のことではあるが相當の數がある筈である。然し根付に至つては其數二千數百に達し恐らく天下第一のコレクションであらう。抑根付は古くから印籠に煙草入れに其他色々の提物に附屬し、大名から庶民に至るまで常用したものである。従つて其形と彫刻は豪奢高雅なものから狂歌の題材になり相な平民的なもの迄、多種多様で興味があり又名工の鏤骨彫心の名作もある。形は小さく以前人の餘り顧みなかつた頃に目をつけられ蒐集を始められた。其蒐集の中には張目驚嘆すべき珍品が多々ある。此蒐集によつて“日本の根付”の著が出来、圖版は博士の自筆になつて居る。其圖を見れば媚びず行はず自ら其人の風格を忍ばしむるものがある。

博士の邸に一人の爺やが居つた。名を多田稻太と云ひ、信州に生れ、若くして博士を慕つて來り仕へ老年に至つて歩行稍不自由になつたが邸内に養はれて居つた。博士が薨去され其葬儀の日即ち6月29日彼も亦忽然と世を去つた。聞く人みな博士に殉死したものと泪を飲んだ。以て博士の下僕に對する溫情が窺はれると思ふ。茲に忠僕の名を擧げて其冥福を祈る。

筆者は大學に於ける博士の最後の助手として親炙したるの故を以て本會の依囑に従ひ、拙文を草し博士を記念する。

佐々木忠次郎博士著作目録

邦文の部

(下記の外に諸雑誌に執筆せられたものも多いがそれ等
の中單行本に總められたものはこの中に集録してある)

書名	発行年(西暦)	臺灣樟樹害蟲調査	
動物通解	明 18 (1885)	第一回報告	" 40 (1907)
蠶の蛆	" " (")	同 第二回報告	" " (")
微粒子病論	" 19 (1886)	清國ニ於ケル柞蠶業	明 41 (1908)
微粒子病の説	" 19 (")	南清旅行談一地理雜誌	" 43 (1910)
微粒子病肉眼鑑定法	" 20 (1887)	第20卷 240號, 241號	" " (")
眞珠貝調査及移植試験報告	" 21 (1888)	蠶兒膿病の病源	" " (")
農科大學桑園	" 26 (1893)	園藝害蟲篇	" " (")
蠶の蛆害	" 28 (1895)	樟樹害蟲調査復命書	" 44 (1911)
農蠶	" " (")	昆蟲檢索表	大元 (1912)
眞珠貝調査第一報	" 29 (1896)	赤油及藍油ノ害蟲ニ 對スル調査	" 3 (1914)
ボルレ氏蠶兒飼育法	" " (")	園藝害蟲篇	" 5 (1916)
新編動物教科書	" 30 (1897)	熊籠と壁蝨	" " (")
日本農作物害蟲篇	" 32 (1899)	樟ムクゲムシ變態調査及樟 腦赤油石鹼驅蟲試験報告	" 6 (1917)
蠶微粒子毒研究第一回報告	" 33 (1900)	五倍子の話一東洋學藝雜誌	" " (")
日本蠶微粒子病研究書	" " (")	第34卷 第425號	" " (")
蟲類發育表	" 34 (1901)	蠶兒の蠅卵嚙下後に於ける 蠶蛆の成育	" 7 (1918)
農作物害蟲篇	" " (")	蔬菜害蟲篇	" " (")
日本樹木害蟲篇	" " (")	福岡縣外二縣樟樹害蟲調査 報告	" 8 (1919)
消毒の注意	" 35 (1902)	東京帝國大學農學部桑樹見 本園目録	" " (")
昆蟲分類法	" " (")	作物害蟲篇	" " (")
蠶病消毒法	" " (")	樟巢蟲調査報告	" 9 (1920)
作物害蟲教科書(害蟲篇)	" 36 (1903)	蠶蛆ノ蛹ニ寄生スル壁蝨	" 10 (1921)
作物病蟲害教科書(病害篇)	" " (")	果樹害蟲篇	" " (")
柞蠶の話	" " (")	鱧鱈の飛蛆一水産學會報	" 11 (1922)
人體の害蟲	" 37 (1904)	第3卷 第4號	" 12 (1923)
新編養蠶教科書	" 38 (1905)	花卉害蟲篇	" " (")
樟樹ノ害蟲調査第一回報告	" " (")	屋内ニ往來スル蠅一第1回 日本動物學大會講演抄録	" 15 (1926)
同 第二回報告(豫報)	" 38 (")	大森貝墟ノ由來	昭 5 (1930)
屋内の動物	" " (")	桑心止癭蠅ノ研究	" 6 (1931)
果樹害蟲篇	" " (")	アカボシカミキリの幼蟲一 應用動物學雜誌第6卷第2號	" 9 (1934)
樟樹害蟲談	" " (")	松茸ノ寄生蠅ニ就テ一農業	" 10 (1935)
		日本の根付	" 11 (1936)
		アラレガコー	" " (")
		動物學雜誌第48卷第1號	" " (")

歐文の部

- Okadaira Shell Mound at Hitachi. (1882)
- On the Life-History of *Ugimya sericariae* RONDANI.—*Jour. Coll. Sci. Imp. Univ. (Tokyo) Vol. I, No. 1.* (1886)
- Some Notes on the Giant Salamandar of Japan (*Cryptobranchus japonicus* Van der HOVEN). —*do. Vol. I. No. 3.* (1886)
- Untersuchungen über *Gymnosphaera albida*, eine neue Marine Heliozoe. —*Jena. Zeitschr. Naturwiss. XX VIII Bd.* (1892)
- On the Scale Insect of Mulberry trees.—*Bull. Coll. Agric. Imp. Univ. (Tokyo) Vol. II.* (1894)
- On the Affinity of Our Wild and Domestic Silkworm.—*Ann. Zool. Jap. Vol. II. No. 2.* (1898)
- On the Parasitic Fly on Silkworm in China.—*do. Vol. III. No. 1.* (1899)
- On the Japanese Species allied to the San José Scale in America. —*Annotationes Zool. Jap. Vol. III, pars IV.* (1901)
- On the Wax-producing Coccid, *Ericerus pela* WESTWOOD. —*Bull. Coll. Agric. Tokyo. Imp. Univ. Vol. VI. No. 1.* (1904)
- On the Feeding of Silkworms with the Leaves of *Cudrania triloba* HANCE. —*do.* (1904)
- Coreau Race of Silkworm. —*do.* (1904)
- The Begger Race (Kojikiko) of Silkworms. —*do.* (1904)
- On the Feeding of the Silkworm with the Leaves of Wild and Cultivated Mulberry trees. —*do.* (1904)
- Some Observations on *Antheraea (Bombyx) yamamai* G. M. and the Methods of its Rearing in Japan. —*do.* (1904)
- A New Field-Mouse in Japan. —*do.* (1904)
- Double Coccon of Silkworms. —*do.* (1904)
- On the Pathology of the Jaundice (Gelbsucht) of the Silkworm. —*Jour. Coll. Agric. Tokyo Imp. Univ. Vol. II. No. 2.* (1910)
- On the Fish-Line (Tegusu). —*do.* (1910)
- Life-History of *Schlechtendobia chinensis* JACOB. (1910)
- On the Life-History of *Truiza camphorae* n. sp. of Camphor Tree and its Injuries. —*Jour. Coll. Agric. Vol. II. No. 5.* (1910)
- Ueber die "Tegusu" Angelschnur. —*Verhandlungen des VIII. Internationalen Zoologen-Kongress zu Graz.* (1910)
- A New Aphis-Gall on *Styrax japonicus* SIEB. et ZUCK. —*1^{er} Congrès International D'entomologie, Bruxelles.* (1911)

- Tyroglyphus muscae*, a mite infesting *Sturmia sericariens*, a Fly noxious to the Silkworm. —*Bull. Coll. Agric. Vol. IX, No. 3.* (1927)
- Ceratopogon shimai*, a New Midge affecting the Domestic Fowl. (1927)
- Notes on a New Chironomid. —*Proc. Imp. Acad. Vol. IV, No. 8.* (1928)
- On a New Phorid Fly infesting our Edible Mushroom. —*do. XI, No. 3.* (1935)
- (昭和 13 年 6 月 雜誌)